嚴本專理弦楽四重奏団
大原総一郎追悼演奏会
'78 7月26日(水)6:30
倉敷市民会館
主 倉敷市・倉敷市教育委員会
催 倉敷市自主文化事業協会・倉敷音楽協会
倉敷市合唱連盟・倉敷室内管弦楽団

大原總一郎追悼演奏会

大原總一郎さんが亡くなってから早くも10年の歳月が流れた。
大原さんは、高度の文化性を備えた人であっただけに、化繊界での国際的存在と呼ばれる外に、広範囲に渉って活躍した遺功、遺徳は、世人のよく知るところであるが、彼氏の音楽遍歴を知る人は案外に少ないのではなかろうか。
今から数えて二十数年前、大原さんの発想から結成され、広域文化融合を目的とする高梁川流域連盟が主催する高等学校合同演奏会は、回を重ねる毎に盛んである。また倉敷の街に音楽図書館をと、私蔵する関連の図書レコードなどを寄贈する意図を含めて建設基金を市に寄付せられたことがある。大原さんは、故郷の街を美術の街であると共に音楽の街にしたい夢を抱いておられた。その夢は、合併直後に新築成った鶴形山麓の文化センターの三階に漸く設営を見るに至ってかなえられたものの、大原さんはその開館を見ずに他界せられた。がしかし、あれから、十年、その図書室とホールは十二分に活用せられ、広くなった市内の各学校、地域、職域などの音楽熱は向上発展の一途をたどっている。
「倉敷を音楽の街に」と強く念じておられた故人を敬仰追慕するためにと、この演奏会を企画した。ご来会のみなさんともども、夏の夕べの一ときを過してご冥福を祈りたい。

大原總一郎略年譜

明治42年　7月29日誕生。
昭和21年(38才)岡山県民芸協会長。倉敷商工会議所会頭。水島港湾改修期成同盟会長。企業誘致に力をつくす。
〃 23年(40才)倉敷民芸館理事長。民芸運動興隆に力を入れる。
〃 25年(42才)長年の夢である音楽図書館建設のために多額の基金を倉敷市へ寄附。関西交響楽協会理事。NHK交響楽団顧問。
〃 31年(48才)日墺協会長。
〃 43年(60才)7月27日永眠。倉敷市名誉市民に推挙せらる。

プログラム

《第1部》

レクイエム（抜粋）

独唱・岡崎順子、中谷和子、石田　徹、大原正義
合唱・倉敷市民合唱団
管弦楽・倉敷室内管弦楽団
指揮・小山裕章

ピアノ協奏曲ニ短調K466第1楽章

ピアノ・福守道子　永井　譲

グリーンスリーブス/小鳥の歌/ぼだい樹

合唱・倉敷少年少女合唱団
指揮・河合　健　伴奏・広田順子

《第2部》

モーツアルト弦楽四重奏曲ニ長調K575
シューベルト弦楽四重奏曲ニ短調「死と少女」

厳本真理弦楽四重奏団

ヴァイオリン……厳本真理
〃……友田啓明
ヴィオラ……生沼誠司
チエロ……黒沼俊夫

厳本真理　友田啓明　生沼誠司　黒沼俊夫

曲目解説

レクィエム　ニ短調K.626　モーツアルト

1791年11月20日、モーツアルトの病は急激に悪化し、ついに病の床につくことになりました。しかし彼は苦しみのうちにあっても、生命のすべてをこの「レクィエム」の作曲に注ぎこんで書きつづけました。そして12月4日の夜明け前、「涙の日」の音符を書きこんでいたペンは8小節目で止まり、愛弟子であるジュッスマイヤーを呼び寄せ、「涙の日」をいかに完結するかを指示し、翌5日の午前0時55分、モーツアルトは永遠の眠りにつきました。

よく知られている話ですが、この作曲の事情を一応記しておきますと、この年の7月、おそろしく厳粛な顔をした「異様な風采の、鼠色の衣服をまとった」一人の男が、モーツアルトを訪れました。その男は、「レクィエム」の作曲を依頼した署名のない書簡を手渡しました。数年来貧乏のどん底にあったモーツアルトは、妻のコンスタンツエと相談のうえ、作曲がいつまでに完成するかわからない、という条件でそれに応じました。

その男は、のちになってヴァルゼック伯爵の家令であり、伯爵は妻の命日に「レクィエム」を演奏させ、しかもそれを自分の作品として発表するため、きびしく名を秘したことが明らかになりました。

ついに完成することなく終ったこの曲は、ジュッスマイヤーが、その楽想をたよりに、彼の手法をかりて彼の死後約2ケ月のちに書きあげられたものです。

ピアノ協奏曲　ニ短調K.466　モーツアルト

この協奏曲は、モーツアルトにそれほど多くない短調の作品です。協奏曲本来の目的は、演奏家の技巧を十分に誇示するところにあり、とくに華麗なイタリヤ様式が浸透していた当時には、曲がはなやかであることが必要な条件でした。したがって、ややもすると暗い気分におちいりやすい短調はこれにふさわしくなかったものと思われます。しかしこの曲では、きわめて緊密な構成を用い、技巧の駆使よりも音楽的な内容にはるかに重点がおかれています。

この曲を含めて以後の作品5曲に共通した特徴がみられます。それは密度がいちじるしく高められ、ピアノを加えた交響曲とでも名づけたいほど、がっしりとした構成がとられている。楽器用法がほとんど固定し、オーケストラとピアノの音色があざやかなコントラストをみせ、特に木管の使い方が巧妙で、堅いピアノの音にこたえて描きだす美しさは、他に類例をみない。緩徐楽章における奥深い心の底をあらわすような、情緒をくりひろげてゆくことなどがあります。

なお、ベートーベンはかなりこの曲に心を寄せていたらしく、第1楽章と終楽章にそれぞれ一つずつカデンツァを書いています。おそらく自分で何回か演奏したであろうと考えられます。

グリーンスリーブス/小鳥の歌/ぼだい樹

グリーンスリーブス――15～16世紀ごろからイギリスで歌われた曲で、エリザベス王朝時代、叙事的な歌や悪歌が多く残されましたが、そのなかで代表的な典雅な民謡です。

小鳥の歌――深尾須磨子作詞、橋本国彦作曲の明かるくて楽しい小曲です。演奏にはかなり技巧を要します。

ぼだい樹――シューベルトの2番目の、そして彼自身としては最後の歌曲集になった「冬の旅」は1827年に作曲されましたが、詩の作者ミュラーはこの年の9月30日、わずか33才で夭折し、シューベルトは翌年にもっと若くて世を去ったのです。「冬の旅」は暗く重足しく現実と幻覚との間を彷徨する寂しい男の心、生き身のまま悲哀を永遠に背負って歩きつづけるよう運命づけられた、さまよえる男の歌といえます。シューベルトはすでに病魔に打ちのめされ、貧窮のどん底にあって、「冬の旅」の後半は死の病床で校正がつづけられ、死後の12月に出版されました。

「菩提樹」(ぼだいじゅ)は「冬の旅」24曲中の第5曲で、民謡風な調べの美しい歌です。伴奏は菩提樹の葉のざわめきを感じさせて、多分に描写的です。第2節の前半で一時短調になり、また第3節のあとにはげしく風の吹きすさぶ場面がおかれ、全体はかなり大きく変えられた有節形式になっています。

弦楽四重奏曲　ニ長調K.575　モーツアルト

この作品は、3曲の「プロシア王四重奏曲」の第一曲にあたる曲です。「プロシア王四重奏曲」について記してみましょう。

モーツアルトは1789年の4月から6月にかけて、音楽上の弟子にあたるカール・リヒノフスキー候にしたがって、ベルリン旅行を企て、このおりポツダム宮殿で、当時のプロシア王フリードリッヒ・ヴィルヘルム二世に会い、その前で演奏をおこなっています。その際、王じきじきに六曲の弦楽四重奏曲の作曲依頼をうけました。しかしモーツアルトは、王のための弦楽四重奏曲の作曲を半分の三曲だけにとどめています。これを「プロシア王四重奏曲」と呼んでいます。

フリードリッヒ・ヴィルヘルム二世は、当時の多くの王候たちと同様音楽を愛し、みずからも楽器を奏く素人音楽家であり、王はチエロをよくしていましたので、モーツアルトも、王の演奏能力を心にとめて作曲しております。チエロは第一ヴァイオリンとならんで表面にでており、高い音域による旋律の担い手としても活躍し、いわば独奏的でさえあります。意図的にチエロのパートが書かれているのが特徴です。しかし当時の作品に共通するモーツアルトの最後期の様式的特徴は、ここでもはっきりした形をとって現れていますし、以前の作品にくらべてかなり単純な構成をもっている点も同様です。

弦楽四重奏曲　No.14ニ短調「死と少女」　シューベルト

この四重奏曲は、その第二楽章に、彼が1817年2月に作った歌曲「死と少女」の伴奏のなかの、死神の行進をおもわせるおもおもしい四拍子の旋律を主題に使っているので、この通称をえましたし、このことによって、彼の弦楽四重奏曲のうちで最も有名なものになりました。全体を通じて成熟したシューベルトの様式にあらわなロマン的な情趣にみち、ことに第一楽章のもつ一種の悲愁の感じは、モーツアルトに通ずるものがあります。作品番号なしの遺作です。

この作品は、1824年3月に着手されましたが、旅行などのためその完成は26年1月です。偶然のことでしょうが、24年にはシューベルトのイ短調四重奏、ベートーベンの作品127の変ホ長調・25年には作品130の変ロ長調と作品132のイ短調・26年には作品131の嬰ハ短調の四重奏曲が完成しています。この3年間に不朽の四重奏の名曲が六曲も作られたことになります。

完成の直後、1826年2月1日、ウィーンの好楽家ヨーゼフ・バールトの宅で試演され、また作曲家の親友フランツ・ラッハナーの宅でも試演されましたが、作曲者の生存中には公演の運びにはいたらず、1833年3月12日、ベルリンでカール・モーザーの弦楽四重奏団によって初めて公演されました。

倉敷市合唱連盟・倉敷音楽協会・倉敷室内管弦楽団のプロフィール

倉敷市合唱連盟は昭和39年に発足し、現在８団体あり、毎年市民音楽祭及び各合唱団が独自の定期演奏会を開催するなど、はなやかな活動を続けております。今回は倉敷少年少女合唱団（昭47年結成・団員110名）倉敷市民合唱団（昭34年結成・団員45名）が出演します。

倉敷音楽協会は昭和46年に発足し、市内在住の音楽家で組織（団員40名）毎年２回定期演奏会を開催するなど、倉敷の音楽興隆に大きな力となっています。

倉敷室内管弦楽団は昭和49年に発足（団員46名）し、倉敷市内唯一のオーケストラとして毎年１回の定期演奏会のほか、サマーコンサート、合唱団の演奏会への賛助出演など、活発な活動を続けており、高度な技術と美しい音楽の創造は定評があり、将来の発展に市民は大きな期待をかけています。

日本の代表的な弦楽四重奏団　厳本真理弦楽四重奏団

厳本真理弦楽四重奏団に寄す

室内楽団としては異例ともいえる年間８回の定期演奏会を、「厳本真理弦楽四重奏団」が自主的にはじめてから、もう12年余、レパートリーも18世紀から現代に及ぶ 200曲あまりもつみ重なり、なによりも１回毎の演奏会にかけた彼らの情熱と、真摯な態度から発するきびしいが、楽しい音楽の魅力は、まさにアンサンブルの極致といってもよい。（**音楽評論家 木村重雄**）

厳本真理弦楽四重奏団の歩み

1964年	現在のメンバーで厳本真理弦楽四重奏団の活動を開始。
1965年４月	ニッポン放送、フジセイテツ・コンサートの公開録音におけるベートーヴェン・ピアノトリオ全曲演奏で第12回民放大会番組コンクール音楽部門最優秀賞を得る。
1965年３～７月	ブラームス室内楽全曲連続演奏会を開催し、昭和40年度第７回毎日芸術賞を受賞する。
11月	“ウィーン古典派室内楽の夕”を開催し、昭和40年度第20回芸術祭奨励賞を受賞。
10～11月	ニッポン放送・フジセイテツ・コンサートで日本では初めてバルトーク弦楽四重奏曲全６曲を２回にわけて演奏し、昭和41年度第21回芸術祭奨励賞を受ける。
1967年３月	厳本真理弦楽四重奏団定期演奏会を開始、年８回を前・後期に分けて東京文化会館で続け、現在も継続中。
1968年11月	第15回の定期演奏会の演奏に対し、昭和43年度明治百年記念一芸術祭・芸術賞を受賞
1970年	レコード・アカデミー賞（東芝レコード）受賞
1971年３～４月	オーストラリア・ニュージーランドに演奏旅行を行い、全27回の演奏会は絶賛を博した。
1972年３月	昭和46年度第22回芸術選奨文部大臣賞受賞。
1974年11月	昭和49年度第４回「モービル音楽賞」を受賞。

演奏者紹介

厳本真理（いわもと　まり）６才の頃より小野アンナ女史につき早くから才能を認められ。12才で音楽コンクール優勝以来、毎日音楽賞、芸術選奨文部大臣賞、ＮＨＫ第24回放送文化賞など受賞歴も多く、楽壇の第一線を歩み続けている。

友田啓明（ともだ　よしあき）鷲見三郎氏に師事し、35年桐朋短大在学中に岩淵竜太郎氏に師事、卒業後日本フィル・読売日響を経て現在は室内楽に専念し、四重奏団の推進力として欠かせない存在である。

生沼誠司（おいぬま　せいじ）45年芸大器楽科卒。日本フィル・古典音楽協会室内合奏団を経て、現在は四重奏団の一員として活躍中、最も期待される人である。

黒沼俊夫（くろぬま　としお）昭和16年東京音楽学校（現・芸大）卒業、日本フィルのチェロ主席奏者を経て、現在は四重奏団の要となり活躍している。

自主文化事業のお知らせ

●**安川加寿子ピアノリサイタル**　8月22日（火）6:30　倉敷市民会館

〔ショパン〕〔ドビュッシー〕〔ラヴェル〕　S2,000円 A1,500円 B1,000円

●**倉敷室内管弦楽団第４回定期演奏会**　12月10日（日）2:00　倉敷市民会館

〔ブリテン〕シンプルシンフォニー　〔バッハ〕二つのヴァイオリンの為の協奏曲
〔モーツアルト〕交響曲第38番「プラーハ」　〔モーツアルト〕ピアノ協奏曲ニ短調
指揮／菊池東　ピアノ独奏／深沢亮子

一般800円 学生600円